

もう失敗しない！暑い夏を乗り切る床屋さん講座

'10 I 柿原 弘樹



肌が焼けるように暑い初夏のある日、筆者は床屋へ出かけた。

春先に切って以来放置したままなので、筆者の髪の毛は見苦しい長さになっていた。前髪が目に入り、耳は横髪に隠れ、湯船に浸かれば後ろ髪が濡れる長さと言えば、想像できるだろうか(次ページの図1を参照のこと)。

床屋に入ると、早速お叱りの言葉を受けた。

「今回は、予約時間を守って下さい」

それもそのはず、筆者は予約時間を5分オーバーして到着したのだ。いやはや、突然便意に襲われまして……(^_^;) 予約制なのだから、時間が押すとマズイのだろう。

「どうしますか？」

「えっと……。ぜ、全体的に短く……」

淡泊な会話を交わすと、大体察しが付いたらしく散髪開始。しかし沈黙。終始無言。

こちらには遅刻した負い目もあり、話しかけることがためらわれた。挙げ句、筆者の髪を切っていた床屋さんは、隣の席で髪を切っていたお客さんと会話を始める始末。このとき、筆者は我が人生の縮図を見た気がした。

散髪が普段と同程度の長さに落ち着いた頃、床屋さんは鏡越しに手持ちの鏡を介して、筆者の後ろ髪の出来栄を見せてくれた。しかし、筆者は暑い夏を乗り切ることを主眼として、今回床屋さんに訪れたのだ。

「もう少し短くても……」

後ろ髪を短くするように要求。筆者にしてはやや挑戦的な一歩であった。

そこへ床屋さんの当然の応酬。

「短くって、どんなイメージですか？」

そう言われると、どう返して良いものかわからない。じっくり考えても仕方ないと思い、咄嗟に思いついた言葉を口にした。

「30分放っておけばドライヤー無しでも乾くぐらいに……」

透かさず、床屋さんの更なる追い打ち。

「それって、坊主なんじゃ……？」

それは違うと、筆者は焦る。

「いや、そこまではしなくていいんです」

その後、筆者と床屋さんの中で会話が交わされることはなかった。

さて、以上の結果から筆者が受けた洗礼は次ページの図2のようであった。



図 1 : Before



図 2 : After

短髪なりにまとまりはあるが、筆者の髪型としては異例の短さだった。
筆者はどうするべきだったのか、以下に教訓を述べる。

□ 予約時間はちゃんと守ろう

→ たかが5分と侮るなかれ。険悪なムードのまま散髪が続いてしまったら、さあ大変。

□ 言いたいことは正しく伝えよう

→ 自分の持っているイメージと相手の思いつくイメージは、往々にして異なる。後ろ髪だけもう少し切って下さいとか、全体的にすいて下さいといった具体的な要求を伝えよう。

□ 楽しくおしゃべりしよう

→ 大切なのは、良い印象を持ってもらうこと。床屋に入ったら、元気に挨拶をしよう。また、最初の話題はこちらから振ろう。自分は会話を楽しみたい、という印象を与えられる。

→ 床屋さんも人間である。こちらが話していて楽しいと感じるならば、相手も同様の感覚を抱いているだろう。ちょっとした世間話で良い。夏場は暑さ、熱中症、異常気象が主流。自分の近況を話す、理髪関係・日頃のヘアセットについて質問するのもアリだ。

今回書いた内容は、実際のところ床屋さんに限らない。飲食店だろうが洋服店だろうが、当然のこととしてやるべきなのだ。この記事を読んだことをきっかけにして、少しでも人との接し方を変えてみてはいかがだろうか。